



# 足尾銅山を世界遺産へ

## ～足尾銅山を構成する資産の紹介③～

このコーナーでは2月号から足尾銅山の構成資産を紹介しています。今回は最終回です。

明治中期以降、飛躍的な発展を遂げた足尾銅山。全国各地から労働者が集まり、最盛期には宇都宮に次ぐ県内第2位の人口38,000人以上を誇りました。現在でもその町並みなどに、当時のにぎわいの面影が残ります。

2月号と3月号では、足尾銅山が飛躍的に発展を遂げるに至った銅の採鉱から選鉱、製錬までの工程にかかわる施設、そして、これらの施設を支えた動力や輸送施設などを紹介しました。今回は、古河鉱業の経営や教育など、生活に密着した施設などを紹介します。くわしくは生涯学習課 文化係 ☎(21)5182



① 古河鉱業 間藤工場

古河鉱業では、銅山で欧米からの輸入機械を使っていたが、明治33年に間藤工場が設置され、ここで輸入機械をモデルに独自の改良を加えた各種機械を製造するようになりまし。大正3年には足尾式3番型さく岩機を考案。大正6年にはさく岩機工場が新設されました。また、昭和17年には工作課の機械部門が銅山から独立し、足尾製作所となりました。



② 古河掛水倶楽部

わたらせ渓谷鐵道足尾駅前にある古河掛水倶楽部は、鉱山都市・足尾の迎賓館として明治32年に建てられた洋館です。華族や政府高官を招いた際の接待や宿舍などに使用されました。

平成17年には、国の有形文化財として登録されましたが、現在も古河機械金属株式会社(旧古河鉱業)の福利厚生施設として活躍し、冬期間を除き土曜・日曜日、祝日は一般公開もされています。



③ 鉱山社宅

足尾銅山は多くの就業者を抱えていました。古河鉱業は、各坑口や工場付近に職員と鉱夫のための住宅地を設け、社宅として提供していました。また、その共用施設として集会所や共同浴場を備え、住宅地に隣接して社宅も置かれました。

足尾の町は、銅山関連施設の周囲に数多く建設された社宅群や一般住宅、商店などを合わせて、一つの都市的形がなされています。



④ 本山小学校講堂

明治25年に、私立古河足尾銅山尋常高等小学校として創立後、昭和22年に公立となり、足尾町立本山小学校と改称しました。古河鉱業は、銅山関連施設以外に福利厚生施設や学校・運動場・託児所など教育・保育施設も設けました。講堂は昭和15年の建設ですが、当時小学校に講堂が建設されるのは珍しいことでした。平成17年4月、本山小は足尾小に統合され、歴史に幕を下ろしました。



⑤ 本山鉱山神社

足尾地域に現存する最古の山神社です。明治22年に坑長(古河鉱業所長)木村長七以下、本山に働く坑夫一同からの寄進(3,279円53銭)によって造営されました。社殿は本口坑(銅産出の山)に向かって、本殿と拜殿からなっています。この神社を中心に銅山の繁栄を願って山神祭が行われるなど、人々の生活と一体となっていました。現在、市指定文化財として保存されています。



⑥ 足尾キリスト教会

明治41年にイギリスのキリスト教団、マイナーズミッションからの献金(当時としては破格の2,500円)で建てられました。マイナーズミッションは、イギリスの鉱山で成功したグリーン・ピビアンが設立した教団です。ピビアンは世界各国の首位鉱山所在地に教会を建てており、日本では足尾銅山が選ばれました。ピビアンの没後、教会は現在の福音伝道教会に受け継がれました。



⑦ 松木地域旧三村

松木地域には中世以来3つの山村がありました。が、明治17年建設の直利橋製錬分工場から排出された亜硫酸ガスの悪影響や山林の乱伐、大火により住居は減少していきました。その後、鉱毒予防工事命令により設置された脱硫塔が煙害を著しくし、住民は移転を余儀なくされました。明治35年には地権者との示談が終結し廃村となりました。現在、多くの方により植樹が行われています。

### 編集を終えて…

足尾銅山が世界遺産に登録されるためには、まず、国内の世界遺産暫定一覧表(暫定リスト)に追加記載されることが必要です。

2月号から3回にわたって紹介してきた足尾銅山を構成する資産は、暫定リストへの追加記載を実現させるために、市が県と共同で文化庁に提出した提案書「足尾銅山―日本の近代化・産業化と公害対策の起点―」に記載した資産です。

これらの資産は、これまでに県などが総合調査を行ったものが中心ですが、足尾地域にはまだ多くの産業遺産があります。足尾銅山の世界遺産登録を推進するため、市ではさらに調査を進めていく予定です。

広報にっこうでは今後も、足尾銅山の世界遺産に向けた取り組みについて、お知らせします。